

No. 999

緑 と 太陽 と

— 千 葉 —

やわらかな日差しを浴びて、かたく身をとじていた草木も、新芽を出し、菜の花は満開、房総半島はもうすっかり春の陽気です。

家族連れや、アベックでにぎわうマザー牧場では3月4日から「春の子供まつり」がはじまりました。

広い野外ステージで本物の仮面ライダーと遊べて子供たちは大喜びです。

毎休日の呼び物「子ブタ競争」はかわいい子ブタの30メートル競争です。

「私の子ブタは走ってくれないワァ」と泣き出しそうな子供、子ブタの逃走にわんぱくも大弱りです。

「めん羊の大打進」では西部劇さながらのめん羊の移動で圧倒されそう、それでも広場ではやわらかな羊の毛に触れ、うれしそうです。緑と太陽の下で子供たちは楽しい一時を過しました。

いつ飛ぶのか— 一番機

— 成田新国際空港 —

新東京国際空港の「3月開港」は、またかけ声に終わった。千葉県成田市三里塚周辺。山は切り崩され、農地も整地され、今、そこには、空港の諸施設が整いを見せている。

4,000 m滑走路が伸びてかってそこで血と涙の闘争があった事を物語るものはなにもない。昭和46年3月。ちょうど2年前、あくまで空港に反対する農民や学生が自ら立木に体をしばり抵抗した第1次強制代執行。今は必死の農民の叫びも、聞こえては来ない。65 mの高さの管制塔がそびえ、関連する建物がその上に建った。

管制塔はすっかり準備を終え、あとは一番機を待つばかり。照明監視室や無線監視室も、テストが繰り返され、あとは本番を待つばかり。開港が遅れ、がっかり首をうなだれる人々が多い。農地を提供し、空港の関連事業を行なう農民会社の社長さん元農民たちだ。その1つの成田興業。専務の神津さんは「1億円以上の投資でゴミ焼却場をたて、空港から出るゴミを一切処理しようとしたが、これでは金利がかさむだけ、困ったものだ。煙突は煙を吐く事なくそびえているだけ。成田空港食堂の社長の鈴木さんは「コックさんや従業員を雇って待ちに待っていたががまんしきれず、弁当業を開業した。1日も早く開港してもらわなくては、

空港公団の施設工事部長は

「95%施設は出来あがっている。開港を遅らせている問題は燃料のパイプラインと、滑走路の南端の鉄塔だ。パイプラインについては、国、公団が今、詰めの段階で交渉している。鉄塔についても、開港が決まれば早期に撤去したい。

滑走路の南端に立つ10万人共有の反対同盟の鉄塔。ここでは、老人行動隊や反対派の学生がねばり強い見張りをしている。この撤去にあたって、また、流血が繰り返されるのか。パイプラインも、付近の住民の反対に会い難行している。46年4月開港という最初の予定から8回も変わった民間投資も含めて約3千億円の巨費を投じた近代設備は、いつ動き出すのか。すでに2年一番機がいつ飛ぶのか今だその予定はたたない。